〈資料〉

沖縄における環境学習としての野外アート創作イベント

田代　豊・中山秀一・仲宗根直司

１．沖縄の海岸環境の価値とアート

海岸環境は南西諸島の自然環境における特徴的で重要な要素の一つであり、人間の生活と沿岸の生物および生態系の基盤となるものである。とくに観光産業や沿岸漁業等にとって、良好な海岸環境の維持は重要である。各地の海岸には各々固有の環境が存在し、それらは様々な理化学的な調査分析によって記録することが可能である。しかし、海岸環境の価値には、人間の精神や心理に対して作用する美的価値が含まれる。例えば、沖縄県が観光客に対して実施したアンケート調査（沖縄県 2019）によれば、沖縄旅行をするにあたって“期待した”と回答した人の割合が最も高かった項目は「海の美しさ」（83.3%）であり、旅行後の満足度についても，“大変満足”と回答した割合が最も高かったのは「海の美しさ」（71.4%）であった。このように、多くの観光客は海の景観の美しさによって沖縄に来訪し、観光対象となった海岸の美的価値が観光産業への経済的効果を通じて顕在化していると言える。

一方で、観光対象となっていない海岸環境の価値については、多くの人に認識されないままに置かれ、それ故に認識されることなく滅失させられる可能性を孕んでいる。人為活動に起因する赤土流出等の水質汚濁や土木工事による改変等によって、南西諸島各地の海岸において環境の劣化や破壊が見られてきた（宇多ら 2002，仲間 2004，下地　2012，田代 2019）。このような事態を招く一因には、海岸環境の価値が正しく評価されておらず、それを滅失させる人為活動によって得られる便益が一方的に評価されていることがあると考えられる。環境の価値には、生態系サービスとしての価値や居住地や生活圏としての機能が含まれるが、それらに加えて美的価値が存在する（藤沢ら 1999）。環境の美的価値は一般に景観として評価されるものであり、Kaplanら（1998）の認知理論やUlrich（1983）の情動反応理論、Appleton（1975）の眺望－隠れ家説のような、景観一般を評価する方法や基準に関する理論が提案されている。国内では、例えば児島ら（1995）は具体的な種々の自然景観について、評価構造の階層化を行い好ましさの評価予測を試みている。また、桑子（2007）は、景観の価値構造について、空間の構造や履歴に加えて評価主体の枠組み・履歴・関心を把握することによる認識を提案している。しかしながら、このような理論を背景として南西諸島海岸環境の美的価値を明らかにしようとする研究は未だ少なく、今後の進展が待たれる（川谷ほか 2017；田代・岩崎 2017；田代・劉 2021）。

環境教育・学習の側面からは、こうした価値の科学的評価だけではなく、市民に価値を広く理解してもらうことも重要であり、そのための方法の検討も必要である。環境教育としての自然体験には、自然界に見られる多様性・階層性・因果性・論理性・再現性・規

則性などの基礎的認識を獲得する「原体験補完」としての意義が指摘されており（能條2006）、自然に関する体験が環境の価値に対する理解を深めることが期待される。環境の美的価値の伝達には、特定の場所を題材とした多くの美術、音楽、文芸作品などのように、芸術的な表現が貢献する場合もある。西田（2008）は、風景は自然と人間との間に定位された関係であり、風景を表現する文学、絵画、映像などの芸術から、自然と人間との関係を読み取ることができると指摘した。これは、風景として表れる環境の人間にとっての美的価値が、人間と自然との間の関係が内包された芸術によって表現されることを示している。

そのような芸術活動の中でも、自然環境そのものを作品の中に取り入れるランドアート、あるいはアースワークと呼ばれる野外制作活動は、こうした環境の美的価値の伝達に大きく関与すると考えられる。例えば、米国の美術家であるジム・デネバンは、広大な砂浜に文様を描いた短時間で消滅する美術作品を制作している。これは砂浜を一種のキャンバスとして用いたものであるだけでなく、海や崖などの周辺の地形を含めたその場所の態様全体が撮影され美術作品として扱われている。また、英国のリチャード・ロングは、ヒマラヤやアンデスなどの辺境の自然の中を歩行し、自らの足跡や、その場の石や木片などを配列して示した歩行経路の痕跡を、その場所の風景とともに写真撮影している。これは、そうした場所を歩行する行為自体を芸術作品として位置付けたものであるが（バーズレイ1993）、それはそうした特定の場所が歩行されることによって、その場所固有の意味が認識され記録されたことになると考えられる。

このようなランドアートの制作が自然環境の中で行われると、その場が新しく風景として認識されるようになる。吉村（2004）は、見慣れることによって注意を払われなくなっていた環境が、何らかの「きっかけ」で再びまなざしを向けられる「非自動化」によって風景が生成することを指摘した。さらに花村ら（2013）は、公共建物内にアートインスタレーションを行うことにより、「自動化」の過程を経ない場合でも、環境の特徴的な構造が特色として前面に浮かび上がる「風景異化」が生じることを示した。ランドアートでは、「きっかけ」となる制作が行われる周辺の自然を構成する山や海、砂浜、崖などの要素は、アート作品として新たに出現する風景を構成する要素となり、その点で価値を人間が認識できるようになると考えることができる。これはさらに、こうした自然の構成要素各々がアート作品の中で視認され意識に上ることにより、作品の構成要素という意味に限定されない、それらの固有の存在価値が思慮される機会となることも期待できる。

２．野外アート創作イベントの試行

以上述べたような、自然の中のランドアート作品が人間の自然に対する認識に及ぼす作用に着目し、特定の場所の環境がそれぞれに有する、人間にとっての価値に対する理解を広めることを企図して、沖縄県内の海岸において以下のような市民参加によるランドアート作品制作を行った。これらの制作は、その場所の特徴的な事象が存在するものの、それが多くの一般市民には知られていないと考えられる地点で実施した。いずれの制作も、作

品のデザインおよび制作作業の指示は中山が行った。また、制作の数日前までに、こうした活動の意図についての説明会を開催し、参加者に来聴してもらった。さらに、現地での制作開始前に、参加者に対して現地環境に関する自然科学的な観点からの解説を行い、制作場所に見られる自然現象の科学的意味についての理解を深めてもらった。

（1）沖縄県国頭村字安波ヒラフー海岸での制作

日時：2008年9月27日13時～ 16時、参加者：8名（新聞告知等によって公募した市民）

沖縄島北部海岸部の地形・地質に関する解説をした。その後、急傾斜の斜面に縁どられ名護層の大型の礫が一面に転がる砂浜において、礫に混ざっていたサンゴ片を並べ、蛇行した線状の作品を制作した。青灰色の礫と白色のサンゴ片とがコントラストをなし、汀線の水の動きと対応する線が、砂浜の奥の岬に視線を導く作品となった。なお、作品は鑑賞終了後、撤去した。

写真１　ヒラフー海岸での制作

（2）沖縄県名護市瀬嵩海岸での制作

日時：2009年10月4日11時～ 16時、参加者：10名（新聞告知等によって公募した市民）

多量のサンゴ片が打ち上げられ大型のカスプが形成される砂浜において、現地海岸環境の特徴とその成因などについての解説を行った。その後、干潮時の砂浜の波打ち際において、打ち上げられていた細かいサンゴ片を砂の上に敷き詰めることにより、汀線から斜めに配置された10の部分からなる穴の開いた不定形の模様を描いた。完成後、潮位の上昇に伴い波によって自然に崩され、下部の模様から順に消滅していく過程を参加者が自由に鑑賞した。

写真２　瀬嵩海岸での制作

（３）沖縄県渡名喜村東部海岸での制作

日時：2013年9月22日14時～ 17時、参加者：7名（大学生）

渡名喜島沿岸部に見られる特徴的な地質と礁池地形についての解説と見学の後、干潮時の礁池内で、砂浜の砂を転石を囲むように円形に敷き詰めた作品を制作した。沖合の濃い海の色と対照的な明るい色の砂による円形が、黒色の転石の配置を明瞭に示す景観が生まれた。完成後、潮位の上昇によって、浅い海水の中に砂の輪郭が揺れて見えるようになり、その後波にさらわれて消滅する過程を参加者が自由に鑑賞した。

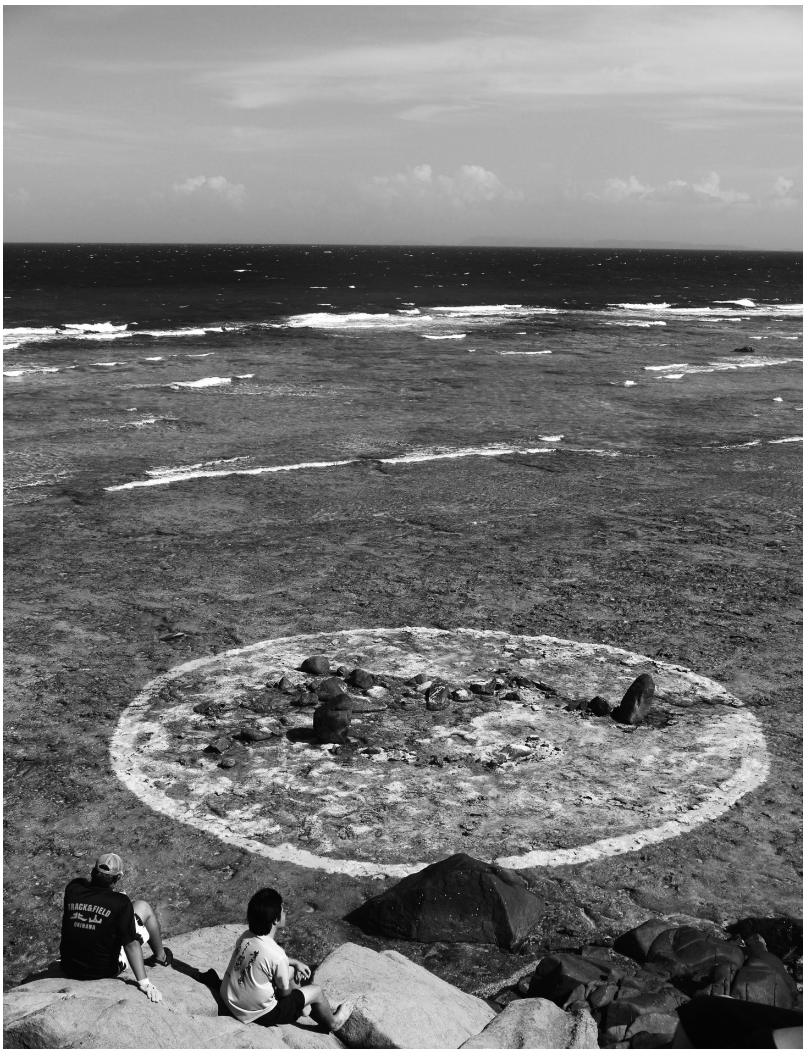

写真３　渡名喜島海岸での制作

（４）沖縄県名護市天仁屋海岸での制作

日時：2014年11月3日14時～ 17時、参加者：7名（大学生）

現地で見られる褶曲などの特徴的な地形・地質について解説と見学を行った。その後、崖下に位置する砂浜において、崖からの落石を円形に並べた作品を制作した。砂浜に点在する様々な色と形状の落石からなる円形と、海面越しの対岸に見える断崖とが呼応する景観が生まれた。作品は鑑賞終了後、撤去した。

写真４　天仁屋海岸での制作

３．野外アート創作イベントの環境学習としての意義

以上の制作において、参加者に対して制作に加わることによって抱いた感想を記入するアンケートを実施した。

・まずは、遊び心。大人が真剣に遊んだ。初めて参加したが、楽しみの先に自然保護があればいい。
・何が何かわからなくやって来て、深い思いというものもなく自由に遊んだ結果、すごく深い意味のあるものに参加できてとてもよかった。
・ランドスケープとしてアートに遊び心が呼び覚まされた。意図も十分伝わった。
・何をするのか分からない、でもおもしろそう！そんな動機で参加したが、有意義な時間だった。
・大変だったけど楽しかった。
・朝・昼・夜を体験してみたい。

これらの回答からは、体を動かして美術作品の制作過程に参加することの楽しさとともに、自然海岸の景観としての価値に気づき、本活動が意図した自然保護や環境保全に対する理解が得られたことがうかがわれた。また、制作直前に現地で行った海岸の自然環境に関する自然科学的な解説に対して参加者は興味を持って聞く様子が見られた。これはジオツアーの環境学習における効果と同様に、自分たちが制作を行う海岸の景観を構成する諸

要素に対する理解と注目を高める効果をもたらし、海岸環境の固有性への理解が深まったと考えられる。さらに、参加者は作品の制作過程および完成後に、自分たちが制作したものを含むその場所の環境全体をアート作品と意識して注視することになり、海岸環境の美的価値について考察する機会となったと考えられる。とくに時間の経過に伴う作品の変化・消滅は参加者の関心をよび、上記（２）では多くの参加者が制作終了後も満潮に向かう長時間にわたって砂浜に滞在し鑑賞を続けた。これは自然現象の流動性と恒常性、およびそれをもたらす不断の物質循環への理解につながる機会となったと考えられる。以上のように、これらイベントは、市民が沖縄の自然海岸の環境とその価値に対する関心と理解を深める機会となったと考えられる。

これまで南西諸島では、以前から地域の民俗文化に着目した芸術作品を現地で展示する様々なイベントが催されてきた。しかしながら、こうしたイベントで展示される作品の多くは、各地に固有の自然の価値をもたらす自然地理的な特徴に直接関連したものではない。そのようなイベントの中には、沖縄島北部地域で継続的に開かれているものもあるが、「『やんばる』で開催する意義を理解することが難しい」という批評（内間 2021）もあり、地域の民俗文化との関連についても必ずしも明瞭なものではないと考えられる。また一方で、砂や石、漂着物など現地の環境に存在する素材を用いるものの、その場所の自然環境の固有性には関連しない意匠の作品を制作するイベントもしばしば催行されてきたが、本活動のように、現地の自然環境に対する理解を重視し、その表現と伝達を目的として、その場にある素材を用いて新しい風景を生み出す試みは数少ない。西田（2008）は、本土の越後妻有や瀬戸内海などで展開される芸術活動について、人々の歴史や文化を含む二次的自然の風景に注目したものであるとした上で、過疎地域と位置付けられる生活圏の風土を再認識させる意義を指摘している。これに対し、沖縄などの南西諸島には自然度の高い海岸環境が存在し、現代においても人間活動からの独立性の高い自然の保護が重要な意味を持っている。このため、南西諸島では自然海岸そのものの美的価値に注目した活動が、本土の諸地域とは異なる独自の意義を持つと考えられる。

京都府の桂川上流域で1998年に完成した日吉ダムでは、「天若湖アートプロジェクト」が2005年以降継続的に開催されている。これは、ダムに水没させられた集落をテーマとした大規模インスタレーションを中心とするイベントで、水没地域の住民とダムの恩恵を受けている下流都市部の住民とが交流する場も設定された。これについて下村・佐藤（2012）は、アートが介在することによって、ダム事業を推進する立場の人と批判する立場の人がともに参加する議論や協力関係が可能となり、「共感と合意の形成に向けての場」をつくることに繋がる可能性を示している。本活動は、参加者の行動の変容等を通じて環境学習としての効果を具体的に測定できる段階には至っていないが、本活動のような芸術を取り入れた市民向けイベントは、様々な人々が社会的立場の違いを越えて参加できる機会となり得ることから、沖縄における環境学習として自然環境の普遍的な価値について理解する、あるいは共有することに今後貢献することが期待される。

謝辞

本活動の立案にあたっては、宮城潤氏のご協力を賜った。また、制作にあたっては各地の住民の方々にご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。また、制作活動の一部は、名桜大学公開講座の中で実施された。

参考文献

宇多高明・菊池昭男・西隆一郎・芹沢真澄・三波俊郎・古池　鋼（2002）：宮古島における海岸護岸の建設とそれによる人工海岸化・生態系の喪失，海洋開発論文集，18，695-700.

内間直子（2021）：美術月評，琉球新報2021年3月10日付.

沖縄県（2019）：平成30年度沖縄県観光統計実態調査，https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/report/tourism_statistic_report/h30_tourism-statistic-report.html [2021.4.24閲覧]

川谷維摩・神村賢次郎・瑞慶覧朝希・田代　豊（2017）：沖縄の自然海岸における景観イメージの特徴，沖縄地理，17，1-9.

桑子敏雄 (2007)：景観の価値と合意形成 (2006 年度 [環境アセスメント学会] 大会報告)--(シンポジウム『景観法』の時代における環境アセスメント). 環境アセスメント学会誌, 5(1), 24-30.

児島隆政・古谷勝則・油井正昭(1995)：自然景観における好ましさの評価構造に関する研究，ランドスケープ研究，58，177-180.

下地邦輝（2012）：沖縄の島々における赤土等による水質汚濁と非汚濁の状況比較，沖縄県衛生環境研究所報，46，115-146.

下村泰史・佐藤久恵（2012）：風景づくりと流域市民のコミュニケーション 天若湖アートプロジェクト，ランドスケープ研究，75，655-660.

田代　豊（2019）：海岸の防災と自然に関する沖縄島ヤンバル地域住民の意識：区長へのアンケート調査による研究，名桜大学総合研究，28，53-58.

田代　豊・岩崎渓太（2017）：砂浜景観としての泡瀬干潟の評価．名桜大学紀要，22，79-82.

田代　豊・劉　逸飛（2021）：南西諸島の砂浜への歩行経路におけるシークエンス景観の構造，沖縄地理，21，33-44.

仲間勇栄（2004）：亜熱帯島嶼環境域における海浜護岸工の造成と海浜の保全に関する調査研究 -沖縄県の宮古島及び渡名喜島を事例にして-，琉球大学農学部学術報告，51，67-76.

西田正憲（2008）：過疎地域の越後妻有と瀬戸内直島における現代アートの特質に関する風景論的考察，ランドスケープ研究，71，785-790.

能條　歩・前田和司・山本理人・速水　修（2006）：大学における自然体験学習指導者養

成カリキュラム，日本科学教育学会年会論文集，30，117-120.
バーズレイ J.著，,三谷 徹訳（1993）:『アースワークの地平 環境芸術から都市空間まで』，鹿島出版会.
花村周寛・加我宏之・増田　昇（2013）: アートインスタレーションを契機とするまなざしの変化から捉えた風景異化に関する研究，ランドスケープ研究，76，571-574.
藤沢　和・角田幸彦・井川憲明・渡辺直道（1999）:『景観環境論』，地球社.
吉村晶子 (2004) : 原風景の生成に関する研究，ランドスケープ研究，67，731-736.
Appleton, J.（1996）: The Experience of Landscape. John Wiley & Sons Ltd. West Sussex.
Kaplan, R., Kaplan, S. and Ryan, R.L. (1998) : With people in mind : Design and Management for Everyday Nature. Island Press，Washington D.C.
Ulrich, R. S. (1983) : Aesthetic and affective response to natural environment. In Behavior and the natural environment (pp. 85-125). Springer, Boston, MA.